



Title	札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査I：学校・家庭・自己および居場所に注目して
Author(s)	加藤, 弘通; 水野, 君平
Citation	子ども発達臨床研究, 11, 1-10
Issue Date	2018-03-20
DOI	10.14943/rcccd.11.1
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/68816
Type	bulletin (article)
File Information	02_1882-1707_11.pdf



[Instructions for use](#)

資料論文

札幌市の小学生・中学生の生活と意識についての調査 I

— 学校・家庭・自己および居場所に注目して —

加藤 弘通¹・水野 君平²The First Survey of Life of Children in Sapporo:
From the viewpoint of School and Family life, Self-esteem
and a sense of Ibasho.

Hiromichi KATO, Kumpei MIZUNO

要 旨

本研究の目的は、質問紙調査を実施することで、札幌市の小中学生の学校や家庭、および自己に対する意識の実態を明らかにすることである。また本プロジェクトの目的としては、継続的に実態調査を行うことで、札幌市の小中学生の経年変化を明らかにし、子ども理解の一助とすることである。今回の2016年度に行われた調査については、さらに「居場所」についても調査しており、札幌市の子どもたちの居場所の実態を明らかにすることも目的であった。札幌市内の公立小学校4～6年生、公立中学校1～3年生2,920名を対象に質問紙調査を行い、以下のことが明らかになった。1つは、学校については概ね肯定的に捉えており、その要因としては、授業・行事・安心感といったものが関連していた。2つは、家庭生活についても肯定的に捉えているものの、学年が上がるにつれて低下する傾向が見られた。3つは、自己意識について、どちらかというとな否定的に捉えている傾向が見られた。最後に、学校外の居場所については、家庭がもっとも多く、その内訳としては、小学生は家族と一緒の場所が、中学生は自室がもっとも多かった。以上をふまえ、実態のみならず、そうした状況が生じる要因等についてさらに検討する必要性を論じた。

キーワード：中学生，小学生，学校生活，家庭生活，自己意識，居場所

Key words：School life, Family, Self-esteem, Ibasho

問題と目的

本研究は、札幌市の小学生・中学生の生活実態を把握するために、「さっぽろ子ども・若者白書」

をつくる会と共同し、北海道大学大学院教育学研究院子ども発達臨床研究センター・子ども発達支援部門のプロジェクトとして、2015年度から行っている実態調査を報告するものである。なお

¹ 北海道大学大学院教育学研究院 准教授

² 北海道大学大学院教育学院 博士後期課程

2015年度の実態調査の結果については、「学校・家庭と自分に関する小学生・中学生アンケート調査」（太田・柳・水野・加藤，2016）として、さっぽろ子ども・若者白書に報告しており、本研究は、その翌年2016年度に行われた調査をもとに分析をしたものである。

本プロジェクトの目的は、継続して観測することで、札幌市の子どもの変化を子どもの視点からより正確に把握することにある。しばしば世間では「子どもが変わった」と保護者、教師に代表される大人の視点から語られる。そして、さらにはその変化に対する危機感が煽られたり、否定的な評価づけがなされたり、場合によっては、新たな支援体制の確立や制度改革などが求められることさえある。

しかし、その一方で、大人や社会の認識がそれほど当てにならないこともある。例えば、1990年代後半に少年事件の凶悪化が叫ばれ、少年法の改正までなされたが、実際には凶悪事件の数自体は減り続けていたのはよく知られている事実である（パオロ・マッツァリーノ，2007）。そして、こうした「子どもが変わった」言説は、「日本の子ども」といった大きな括りのみならず、「うちの市の子どもたち」、「この学区・うちの学校の子どもたち」の様子といったローカルなレベルで語られることもある。

そこで本プロジェクトでは、継続的に小学生・中学生を対象とした調査を行うことで、札幌市の小学生・中学生に具体的にどのような変化が起きているのか、あるいは起きていないのかを把握するための基礎資料を提供することを目的としている。

以上のような問題意識をふまえ、本研究では、2016年度における札幌市の小学生・中学生の学校・家庭・自己に関する意識の実態、およびその関連性を明らかにすることを目的とする。また各年度の調査においては、基本的に同じ調査項目を使用しているが、1問だけその年度のみ焦点化したテーマに基づいた質問項目を加えている。

2016年度に関しては「今、札幌市の子どもの居

場所はどこにあるのか？」に焦点をあて、自由記述で回答を求めた。それにより、子どもたちの居場所を把握するとともに、居場所をめぐって、札幌市が抱える課題を析出することが目的である。

方 法

1. 調査協力者

札幌市内の公立小学校16校43学級の4～6年生1,060名、公立中学校11校66学級（うち特別支援学級4学級）の1～3年生1,860名、計2,920名。対象者の性別、学年、学級種、在住区の内訳はTable 1～3の通りである。

Table 1 調査協力者の内訳（人）

		男子	女子	計
小学校	一般学級	543	517	1,060
	特別支援学級	0	0	0
	計	543	517	1,061
中学校	一般学級	896	939	1,838
	特別支援学級	16	9	25
	計	912	948	1,860

Table 2 各区の調査協力者の内訳（人）

中央区	607
北 区	174
東 区	572
白石区	1,088
豊平区	111
南 区	13
西 区	32
手稲区	266
厚別区	57

Table 3 各学年の協力者数の内訳（人）

小学校	4年生	285
	5年生	259
	6年生	517
中学校	1年生	776
	2年生	545
	3年生	543

2. 手続き・調査内容

各学級担任を通して質問紙調査を配布、実施した。質問紙の内容については、①学校生活について(4項目)、②授業について(教科の好み、理解・関心度、各11項目)、③授業や宿題で分からないときの対応(5項目)、④友だちとの関係(4項目)、⑤教師との関係(5項目)、⑥学校・家庭への安心感(2項目)、⑦居場所(1項目、自由記述)、⑧家族関係(3項目)、⑨自分への意識(7項目)であった。⑦以外は、「まったくあてはまらない(1点)～非常に当てはまる(5点)」までの5件法で回答を求めた。

結 果

1. 学校についての意識

学校生活についての意識を知るために、学校生活についての項目「学校は楽しい」について学年別による平均を Figure 1 に示した。その結果、学年によって差がみられ ($F(5,2912) = 8.96$, $p < .001$)、多重比較の結果、小4、小6の平均値が、小5、中1、中2、中3の平均値より有意に高かった。つまり、校種別にみると、小学校では5年生が他の学年に比べ、学校を楽しいと思う気持ちがより低かったのに対し、中学校ではそのような傾向なかった。また小学生(4年生、6年生)

に比べ、中学生のほうが学校を楽しいと思う気持ちが低かった。

それではこうした学校生活の楽しさには、どのような要因が関連しているのか。それを検討するために、他の学校生活に関する要因、友人関係、教師との関係に関わる要因と学校の楽しさの関係について相関分析を行った。Table 4 と Table 5 はその結果を校種別に相関係数が高かったものから順に並べたものである。

Table 4 「学校は楽しい」と関連要因との相関(小学生)

学校の授業(勉強)は楽しい	.606**
学校は「安心できる場所」である	.554**
学校の行事は楽しい	.479**
「学校に行きたくない」と思うことがよくある	-.452**
友だちはたくさんいるほうだ	.362**
先生は私の気持ちをわかってくれる	.345**
友だちといると楽しい	.344**
先生は私の話を真剣に聞いてくれる	.316**
先生は私が困ったときに相談にのってくれる	.287**
	** $p < .01$

Table 5 「学校は楽しい」の関連要因との相関(中学生)

学校の行事は楽しい	.582**
学校の授業(勉強)は楽しい	.555**
学校は「安心できる場所」である	.510**
友だちといると楽しい	.475**

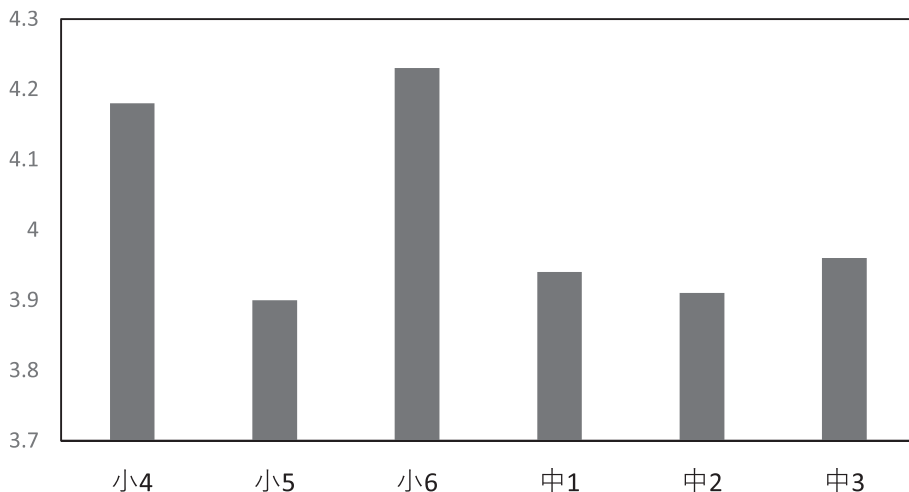


Figure 1 「学校は楽しい」の学年別平均値

「学校に行きたくない」と思うことがよくある	-.442**
友だちはたくさんいるほうだ	.399**
先生は私の話を真剣に聞いてくれる	.344**
先生は私が困ったときに相談にのってくれる	.331**
先生は私の気持ちをわかってくれる	.331**

** $p < .01$

その結果、小学生で学校の楽しさにもっとも関連していたのは授業 ($r = .606$) で、中学生では行事であった ($r = .582$)。また上位3つは、小中学生いずれも授業、行事、学校への安心感という点は共通していた。したがって、子どもたちが学校を楽しいと思えることには、授業・行事を楽しいと思えること、また学校に対して安心感を抱けることが重要であることが分かる。

なお授業の楽しさと各教科の理解・関心度を検討した結果が Table 6 と Table 7 である。小学生・中学生ともに理科科目の理解度が授業の楽しさに関係していることが分かる一方で、各学校や教師の独自性が出る総合的な学習が第3番目に強い関連性をもっていた。

Table 6 授業の楽しさと各教科の理解・関心度 (小学生)

算数・数学はよくわかる	.411**
理科はよくわかる	.373**
総合的な学習はおもしろい	.364**
社会科はよくわかる	.349**

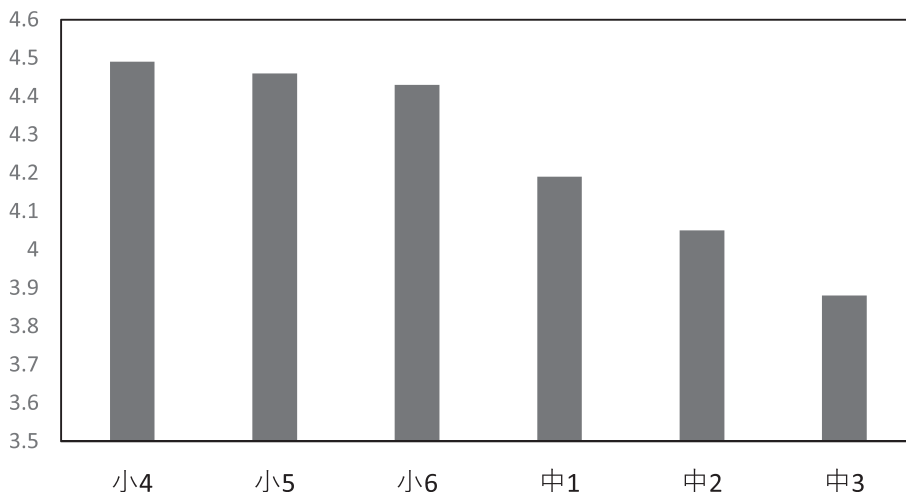


Figure 2 「家庭は楽しい」の学年別平均値

音楽はおもしろい	.332**
国語はよくわかる	.322**
道徳はおもしろい	.299**
家庭科、技術・家庭はおもしろい	.285**
外国語・英語はよくわかる	.268**
図工・美術はおもしろい	.225**
体育、保健体育はおもしろい	.210**

** $p < .01$

Table 7 授業の楽しさと各教科の理解・関心度 (中学生)

理科はよくわかる	.427**
算数・数学はよくわかる	.405**
総合的な学習はおもしろい	.389**
社会科はよくわかる	.383**
国語はよくわかる	.382**
家庭科、技術・家庭はおもしろい	.382**
外国語・英語はよくわかる	.371**
道徳はおもしろい	.370**
音楽はおもしろい	.367**
図工・美術はおもしろい	.287**
体育、保健体育はおもしろい	.246**

** $p < .01$

2. 家庭についての意識

家庭生活についての意識を知るために、家庭生活についての項目「家庭は楽しい」について学年別による平均を Figure 2 に示した。その結果、学年によって差がみられ ($F(5, 2567) = 11.25$,

Table 8 「家庭の楽しさ」と関連要因の相関

	小学生	中学生
家庭は「安心できる場所」である	.535**	.469**
家族は、自分の話をよく聞いてくれる	.507**	.713**
家庭での心配ごとがある	-.298**	-.233**

** $p < .01$

$p < .001$), 多重比較の結果, 小4, 小5, 小6の平均値が, 中2, 中3の平均値より有意に高かった(小4, 小5, 小6, 中1 > 中1, 中2 > 中2, 中3)。つまり, 学年別にみると, 中1を挟んでその前後で家庭を楽しいと思う度合いが下がるといことが分かる。

家庭の楽しさに他の家庭生活に関わる要因のどのようなものが, どの程度関連しているのかを検討したのが, Table 8 である。小学生では家庭への安心感がもっとも家庭の楽しさに関連していたのに対し, 中学生では「自分の話をよく聞いてくれる」ことがもっとも関連していた。また小学生に比べて, 相関係数の値も非常に高かった。したがって, 家庭生活の充実のためには, 中学生以降においては, 自分の話に耳を傾けてくれる家族の存在が非常に重要であると考えられる。

3. 自己についての意識

自己についての意識を知るために, 自己意識に

ついで項目「自分のことが好きだ」について学年別による平均を Figure 2 に示した。その結果, 学年によって差がみられ ($F(5, 2546) = 9.17, p < .001$), 多重比較の結果, 小4, 小6の平均値が, 小5, 中1, 中2の平均値より有意に高かった(小4, 小6 > 小5, 中3 > 中3, 小5, 中2, 中1)。つまり, 校種別にみると, 小学校では小5が他学年に比べ, 自分のことを好きだとする意識が低いことが分かる。中学生については, 統計的に有意な差ではなかったが, 学年が上がるにつれて, 上昇する傾向が見られた。また全体的にみると, 小4以外は平均値が3点を下回っており, どちらかという否定的に自己を捉えていると考えられる。

Table 9 「自分のことが好き」と関連要因の相関 (小学生)

自分にはいいところがたくさんある	.594**
自分は役に立つ人間だ	.550**
自分は人から必要とされている	.478**
学校は楽しい	.305**

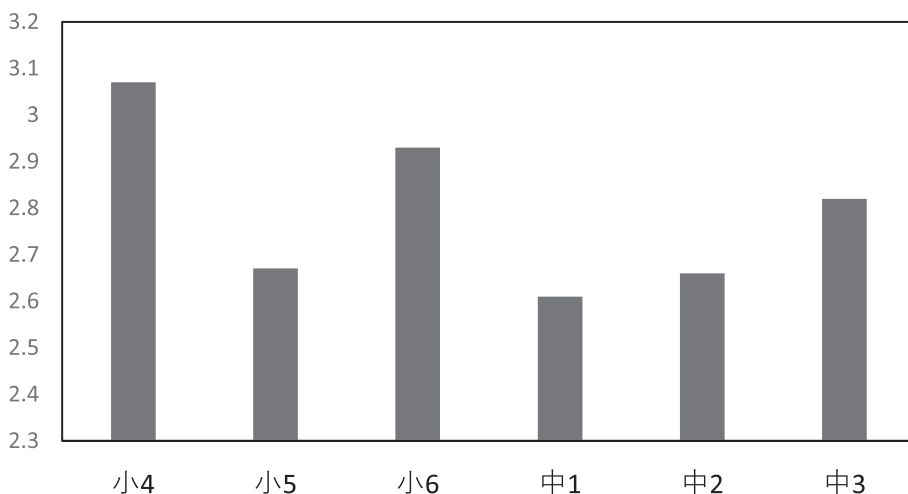


Figure 3 「自分のことが好きだ」の学年別平均値

友だちはたくさんいるほうだ	.269**
家庭は楽しい	.262**
先生は私の気持ちをわかってくれる	.242**
自分のよいところも悪いところもわかってくれる	.235**
先生は私が困ったときに相談にのってくれる	.217**
先生は私の話を真剣に聞いてくれる	.178**
友だちといえると楽しい	.163**

** $p < .01$

Table 10 「自分のことが好きだ」と関連要因の相関 (中学生)

自分にはいいところがたくさんある	.695**
自分は役に立つ人間だ	.654**
自分は人から必要とされている	.645**
友だちはたくさんいるほうだ	.302**
学校は楽しい	.277**
先生は私の気持ちをわかってくれる	.231**
友だちといえると楽しい	.194**
自分のよいところも悪いところもわかってくれる	.193**
先生は私の話を真剣に聞いてくれる	.166**
先生は私が困ったときに相談にのってくれる	.160**
家庭は楽しい	.137**

** $p < .01$

自分のことが好きだといった自己肯定感にどのような要因が関わっているのかを検討するために、他の自己意識、学校、家庭、友人関係、教師との関係に関わる要因との関連性を検討した

(Table 9, Table 10)。その結果、小中学生ともに長所(「自分にはいいところがたくさんある」)や自己有用感(「自分は役立つ人間だ」「自分は人から必要とされている」)が強く関連していた。その一方で、小学校では「学校が楽しい」「友だちはたくさんいるほうだ」の順が、中学校では「友だちはたくさんいる方だ」「学校は楽しい」という形で、友だちの順位が上がっており、また係数の値も小学校が $r = .269$ だったのに対し、中学生は $r = .302$ とその関連性も強くなっていた。また他にも中学生になると家庭の要因(「家庭は楽しい」)の順位が下がっており、教師との関係についても関連性の強さが、小学生は $rs = .178 \sim .242$ だったのが、中学生は $rs = .160 \sim .234$ と若干下がっている。つまり、小学生と中学生を比べた場合、自己肯定感に対して、長所や自己有用感が強く関連している点では差は無いが、中学生になると、家庭や教師といった大人の要因の関連性の強さは相対的に下がり、友人の数といった友人関係に関わる要因がより強い関連性をもつようになると考えられる。

4. 居場所について

2016年度の調査では、この年度に限った調査項目として「居場所」を取り上げた。そこで今回の

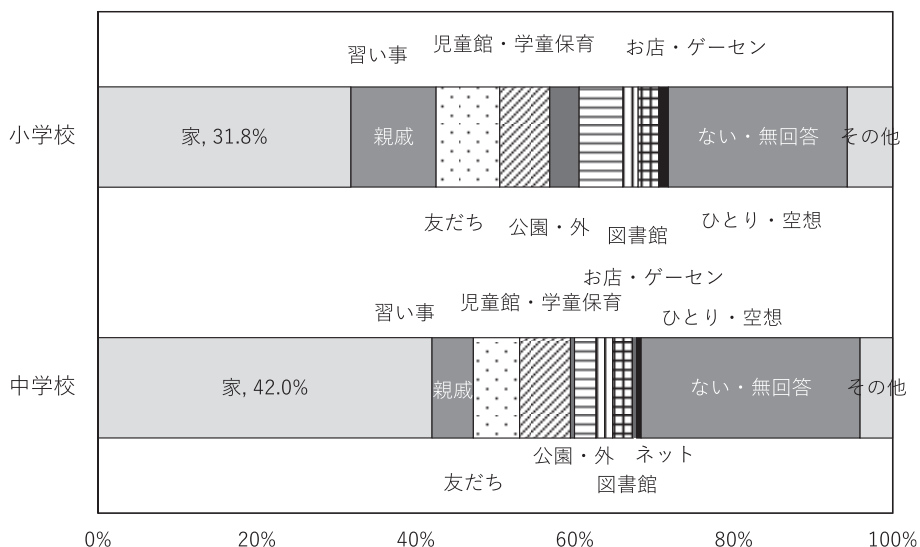


Figure 4 校種別居場所の内訳

調査では「学校以外で安心できる場所はどこか書いてください」という質問のもと、自由記述で回答を求めた。その結果を校種別に示したのが Figure 4 である。

小学生・中学生ともに学校を除く居場所で、もっとも多かったのは家であった。次いで親戚（祖父母、親戚）の家、友だちの家、公園・外というものであった。小学生と中学生で比較すると、小学生に比べ、中学生のほうが、学校以外の居場所を「家」と答える者の割合が多く、また「ない・無回答」の者の割合も多かった。

小中学生ともにもっとも居場所として記述された割合が高かった家について、その内訳をさらに詳細に検討したところ、小学生では家の中でも「自室」に居場所があるとした者の割合は 18.1% だったのに対し、中学生では 36.1% であった。つまり、中学生では家に居場所があると答える者が小学生に比べ多いが、それは自室でひとりで行われるということを意味している者も多いということである。ちなみにそれ以外に含まれるものとしては、トイレやお風呂などが該当する。

さらにこの調査項目では「学校以外で安心できる場所」について聞いている。したがって、「ない・無回答」と回答している者であっても、学校に居場所があれば、それが直ちに居場所がないと

いうことを意味しているわけではない。そこで他項目の「学校は安心できる居場所である」を参照し、それに対して「全くあてはまらない」、つまり、学校は全く安心できる居場所ではないと答えている者が、どこに居場所を見いだしているのか、あるいは見いだしていないのかを検討した。

まず「学校は安心できる居場所である」についての回答を小学校・中学校別に示したのが Figure 6 である。その結果、小学校で 74 名 (7.0%)、中学校で 226 名 (11.9%) の者が、「全くあてはまらない」と回答していた。

そこでこの「学校が安心できる居場所である」に対する回答が、「全くあてはまらない」群のみを抽出し、この子どもたちの居場所がどこにあるのかを再度検討した (Figure 7)。

その結果、「学校が安心できる居場所である」に「全くあてはまらない」と答えた者の居場所としては、小中学校ともに家をもっとも多かった。そして次いで多かったのは(居場所が)「ない」であった。したがって、札幌市の子どもの場合、学校に居場所がなく、さらに家に居場所もなく、どこにも居場所がないとなってしまう者が一定数存在することが分かる。特にその傾向は中学校で顕著である。

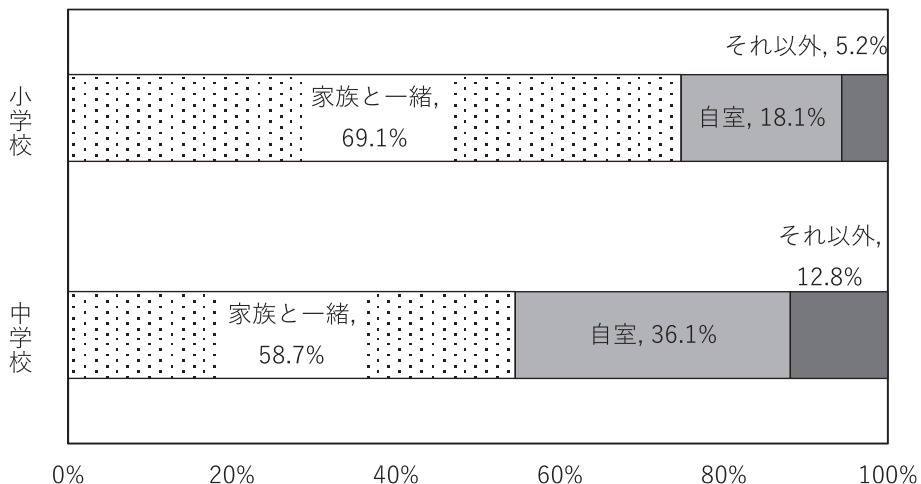


Figure 5 居場所が「家」の内訳

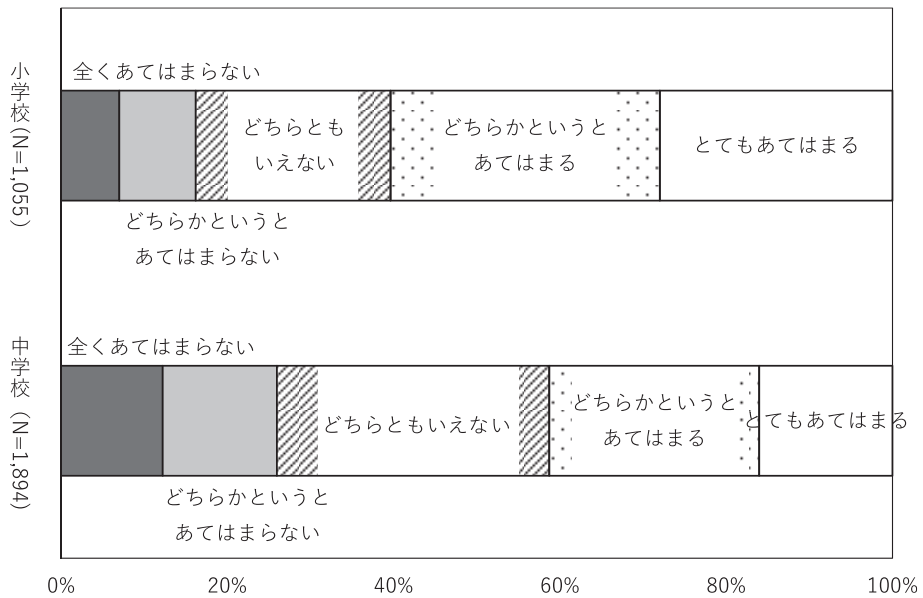


Figure 6 「学校は安心できる居場所である」に対する校種別回答の割合

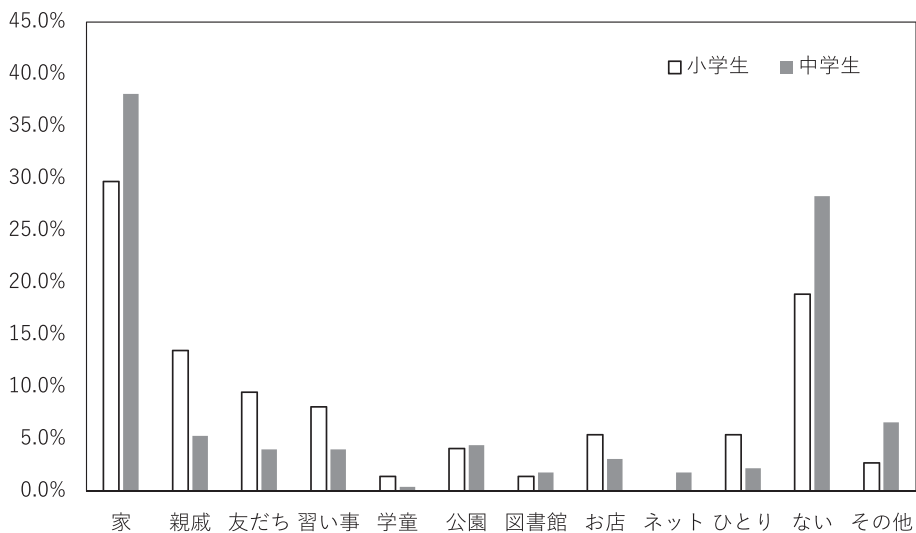


Figure 7 学校が安心できる居場所では全くない者の居場所の内訳

考 察

以上、札幌市の子どもたちの生活と意識を検討するために、学校・家庭・自己、加えて居場所についての意識についてみてきた。以下、本調査の結果、明らかになった点をまとめ、若干の考察を加える。

まず学校については、学年による差がみられたものの、もっとも低い平均値を示した小学5年生

でも3.9点であった。本調査は「全くあてはまらない（1点）」～「非常にあてはまる（5点）」で回答してもらっているため、いずれの学年も平均的にみて、学校生活を肯定的に捉えていることが分かる。ただし、「学校は安心できる居場所である」に対して「全くあてはまらない」とした者が、小学生で7.0%、中学生で11.9%がいた点については注意深く見守っていく必要があると思われる。特にこうした傾向が年度によって異なるのか、あ

るいはどのように変化していくのかということは札幌市の教育事情を評価する上で、重要な視点であると思われる。

さらに他の調査と比較可能な項目である「学校の授業（勉強）が楽しい」についてしてみると、東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所（2016）によると、「授業が楽しい」について肯定的な回答（「とてもあてはまる」「まああてはまる」）をした者の割合は、小学生（4～6年生）で77.0%、中学生で64.9%であった。一方、本調査で「学校の授業（勉強）が楽しい」について肯定的な回答（「とてもあてはまる」「どちらかという」とあてはまる」）をした者の割合は、小学生で55.9%であり、中学生で42.4%であった。東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所（2016）が何件法で回答を求めているのかが、不明であるため、慎重な考察が必要であるが、単純に比較した場合、札幌市の小中学生の授業に対する肯定的評価は低いといえる。

また学校生活の楽しさには、授業や行事が強く関係しており、授業の楽しさには、総合的な学習といった学校や教師の独自性が出やすい科目も比較的強く関連していた。したがって、学校生活の充実を図るためには、何か新たな取り組みが必要というよりも、むしろ、学校がこれまでも大切にしてきた授業や行事といった取り組みを再度見直し、実施していくことが重要であると思われる。特に近年、教員の負担軽減を目指して、行事の削減が叫ばれることが多いが、行事が良い意味でも悪い意味でも子どもの学校生活に対する評価に強く関連していることには留意する必要があるだろう。また総合的な学習といった教師の独自性が出やすい科目が、授業の楽しさに比較的強く関連していたことから、多忙化する学校現場において、改めて授業を作る時間の確保の重要性が問われていると思われる。

次に家庭については、学年が上がるにつれて、特に小学校から中学校への移行を挟んで「家庭は楽しい」の平均値が下がる傾向にあった。しかし、もっとも低い中学3年生でも平均値は3.88点で

あり、他の学年はすべて4点を越えていた。したがって、平均的にみて札幌市子どもたちは家族との関係は良いといえる。とはいうものの、上記の結果では示さなかったが、「家庭は安心できる居場所である」に対して、「全くあてはまらない」と答えた者が各学年で1.0～4.2%いたことも事実である。この数値を小さいとみるのか、大きいとみるかは意見の分かれるところである。しかし、ほとんどの者が家庭を肯定的に捉えている中で、ごく少数の者がそのような状況に置かれているという視点で見ると、当事者の児童生徒は非常に厳しい格差を認識せざるを得ない状況に置かれているとも考えられる。

自己については、小学4年生を除き、すべての学年で「自分のことが好きだ」という質問に対する平均値が2点台であり、平均的にみて、自分自身を否定的に捉える傾向にあることが分かった。しかし、自己肯定感や自尊感情の低下は、思春期一般にいわれることである（加藤，2014）。したがって、札幌の子どもたちの自己肯定感が低いということがそのまま問題であるということの意味しているとはいえない。こうした点こそ継続的な調査によって、年度ごとどのように変化しているのか（あるいは変化していないのか）を明らかにする必要があると思われる。

最後に「居場所」についてであるが、学校以外の居場所としては「家」がもっとも多く、小学生に比べ、中学生の方がその割合は高かった。当初、居場所として「家」を上げる者の割合は、小学生のほうが多いと予想していたが、実際はそうではなかった。しかし、その内訳をさらに詳細に検討してみたところ、中学生の場合は、家でも「自室」の割合が小学生よりも約2倍高く、「家族と一緒に」は10%ほど低い値を示していた。したがって、同じように家に居場所を感じるとしても、中学生の方が家のさらに奥にひきこまれるようになる傾向が高まる可能性がうかがえる。

さらに学校における居場所との関係で考えたときに、特に中学生においては、学校に居場所が持たず、さらに家庭にも居場所がないとなると、居

場所がどこにもないとなる可能性が高いことも示唆された。こうした居場所の問題には、貧困等の問題も絡んでくると思われるため、どこにも居場所がない子どもたちがどのような子どもたちであるのか、さらに詳細に検討を進めていく必要がある。

文 献

加藤弘通 2014 思春期は「むずかしい」年頃なのか？
季刊 保育問題研究（新読書社），263，32-41.

太田一徹・柳悌二・水野君平・加藤弘通 2016 「学校・家庭と自分に関する」小学生・中学生アンケート調査 さっぽろ子ども・若者白書をつくる会編 さっぽろ子ども・若者白書，pp.247-269.

パオロ・マツァリーノ 2007 反社会学講座 ちくま文庫

東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所 2016 「子どもの生活と学びに関する親子調査 2015」速報版
http://berd.benesse.jp/up_images/research/kodomoseikatsu_digest_web_all.pdf (2018/01/17)